

「由緒沿革誌其ノ一」の翻刻と平安義会の沿革

―『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の紹介(三)―

下 川 雅 弘*

Introduction to Heian-gikai Siryo (the Historical Materials of the Heian-gikai) and Ohkitsu-zaidan Siryo (the Historical Materials of the Ohkitsu-zaidan) for the Study of Kyoto-kanke-shizoku (Ⅲ)

Masahiro SHIMOKAWA*

Abstract

The term Kyoto-kanke-shizoku refers to the low-level functionaries who served in the Imperial Court until 1869. They became unemployed and impoverished as a result of the Meiji Restoration. The organizations Heian-gikai and Kyoto-Ohkitsu-zaidan were founded to support them. Heian-gikai Siryo (the Historical Materials of the Heian-gikai) and Ohkitsu-zaidan Siryo (the Historical Materials of the Ohkitsu-zaidan) are the materials handed down from generation to generation in these organizations. In 2016, these materials were donated to the Kyoto Institute, Library and Archives. This text was written to introduce them for being used in the study on the Kyoto-kanke-shizoku.

はじめに

本稿は、近世以前において朝廷に出仕していた官家士族について、その近代以降の動向の解明に資するため、京都府立京都学・歴史館所蔵『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の一部を、逐次翻刻・紹介することを目的としている。^①その(三)となる今回は、同史料群のなかから、とくに平安義会の沿革に関する史料を取り扱う。

平安義会とは、官家士族の救済等を目的とする団体で、明治二十四年(一八九二)五月の設立とされている。官家士族の子弟を教育する目的で設立された平安義校の廃止が、明治二十六年(一八九三)に決定すると、平安義会は官家士族の子弟に対する奨学事業を展開していった。^②

本稿では、平安義会の沿革に関する明治十三年(一八八〇)から昭和三年(一九二八)の史料を綴込んで簿冊とした『平安義会資料』所収「由緒沿革誌 其ノ一」の大部分を翻刻・紹介し、平安義会の沿革についてあらたな情報を提供したい。

一 『平安義会資料』所収「由緒沿革誌 其ノ一」の構成と解題

まずは、『平安義会資料』所収「由緒沿革誌 其ノ一」の冒頭に記載された目録を引用する。

目録

壹 沿革ノ概略

貳 明治十三年御真影御下賜ノ御沙汰書

参 平安義会組織承認 宮内大臣指令

四 官家士族恩賜金管理ノ件ニツキ平安義会設立ニ伴ヒ三條家ヨリ引継方願出ノ書類

五 同前宮内大臣指令ニ基キ管理事務引継キニ関スル書類

六 恩賜金継続願ノ件

七 御結婚二十五年御祝典ニツキ画幅献納伺書

八 皇太子殿下御成婚奉祝ニツキ花瓶献納ノ件

九 大正天皇御真影御下賜願

壹〇 今上兩陛下御真影御下賜願

壹壹 京都行幸御駐輦ニ際シ相当ノ御褒賞懇願ノ件

宮内大臣宛

壹貳 同

内閣総理大臣宛

これらに綴られた膨大な書類のなかから、本稿では、(一)「記(平安義校と平安義会)」、(二)「本会育英事業ニ関スル概略」、(三)「成績(奨学事業の実績)」、(四)「御真影御下賜ノ御沙汰書」、(五)「平安義会組織承認」、(六)「官家士族恩賜金管理ノ件ニツキ平安義会設立ニ伴ヒ三條家ヨリ引継方願出ノ書類」、(七)「官家士族恩賜金ニ関スル事務引継ノ件ヲ広告スル書類」、(八)「恩賜金継続願ノ件」、(九)「御祝典ニ付伺書」、

(十)「皇太子殿下御成婚奉祝ニツキ花瓶献納ノ件」、(十一)「大正天皇御真影御下賜願」、(十二)「今上両陛下御真影御下賜願」、(十三)「京都行幸御駐輦ニ際シ相当ノ御褒賞懇願ノ件 宮内大臣宛」、(十四)「京都行幸御駐輦ニ際シ相当ノ御褒賞懇願ノ件 内閣総理大臣宛」を翻刻・紹介したい。なお、翻刻に当たっては、原則として旧字を新字に改めている。それぞれの史料についての解題は、以下の通りである。

(一)の「記(平安義校と平安義会)」は、「壹 沿革ノ概略」の二番目に綴られた書類である。⁽³⁾本文中に「明治三十年一月二至リ(中略)、漸次会則ヲ改善シ、其業務ヲ保持シテ現今ニ至レルモノナリ」「現下法人組織ニ変更スルヤ否ハ、其利害得失今尚ホ調査中ナリ」とあることから、明治三十年(一八九七)一月以降、平安義会が社団法人として承認される明治四十二年(一九〇九)六月までの期間に、平安義会が法人組織化を目指すなかで作成されたものと推定される。平安義校と平安義会が異名同体の組織であり、平安義校が所有した土地建物等の権利が、平安義会に属することを主張する内容である。なお、表題には「記」としか書かれていないが、便宜上その内容により「記(平安義校と平安義会)」という史料名を付けた。

(二)の「本会育英事業ニ関スル概略」は、「壹 沿革ノ概略」の三番目に綴られた書類で、平安義会が奨学事業を始めるに至った経緯と、育英事業の概要について、明治四十四年(一九一一)四月二十七日付でまとめたものである。本文最後に「猶本会定款、奨学規則、会報等添付致候間、御参照相成度候也」とあることから、定款・奨学規則・会報等とともに、関係官公庁などに提出された書類の控えと考えられ

る。

(三)の「成績(奨学事業の実績)」は、「壹 沿革ノ概略」の最後に綴られた書類である。本文冒頭に「本平安義会ハ明治十二年七月金参万円御下賜ヨリ起リ(中略)、爾来大正七年ニ至ル迄」とあることから、大正七年(一九一八)時点での平安義会における奨学事業の実績について、調査結果をまとめたものと考えられる。なお、表題には「成績」としか書かれていないが、便宜上その内容により「成績(奨学事業の実績)」という史料名を付けた。

(四)の「御真影御下賜ノ御沙汰書」は、「貳 明治十三年御真影御下賜ノ御沙汰書」に綴られた唯一の書類で、明治天皇の御真影が産業誘導社(明治十二年に官家士族への授産事業のため設立)に下賜されたことを、明治十三年(一八八〇)四月に、岩倉具視が伊丹重賢・尾崎三良・桜井能監⁽⁴⁾に伝えたものの写しである。

(五)の「平安義会組織承認」は、「参 平安義会組織承認 宮内大臣指令」に綴られた二通の書類からなる。一通目の書類は、平安義会組織承認の件について、明治二十六年(一八九三)八月一日に、京都府知事千田貞暁が、平安義会の服部保親・鳥居川憲昭に宛てた通達で、二通目の書類は、同伴を同年七月二十八日に、宮内大臣土方久元が、京都府に宛てた通達である。なお、二通目の書類は、宮内省の罫紙が使用されているものの、宮内省内事課発の朱印が墨で抹消され、「写」と墨書されている。

(六)の「官家士族恩賜金管理ノ件ニツキ平安義会設立ニ伴ヒ三條家ヨリ引継方願出ノ書類」は、「四 官家士族恩賜金管理ノ件ニツキ平

安義会設立二伴ヒ三條家ヨリ引継方願出ノ書類」に綴られた二通の書類からなる。一通目の書類は、官家士族に下賜されていた恩賜金の管理について、明治二十六年九月十一日に、従来の管理者である伊丹重賢・尾崎三良・桜井能監が、同年七月に平安義会会長に就任した伊丹重賢に宛てて管理の引き継ぎを願ひ出た書類である。二通目の書類は、官家士族に下賜されていた恩賜金の管理を平安義会に引き継ぐ件について、一通目の書類に先立つ同年九月八日に、伊丹・尾崎・桜井が、宮内大臣土方久元に宛ててその承認を求めた書類と、これに対する宮内大臣からの承認書の写しである。

(七)の「官家士族恩賜金ニ関スル事務引継ノ件ヲ広告スル書類」は、「五 同前宮内大臣指令ニ基キ管理事務引継キニ関スル書類」に綴られた唯一の書類で、官家士族に下賜されていた恩賜金、およびその管理事務の引き継ぎが完了したことを、京都在住の旧官家士族に報告するため、(六)の二通の書類の写しとともに、明治二十六年九月十一日付で作成された書類である。この書類には、恩賜金の旧管理人である伊丹重賢・尾崎三良・桜井能監と、平安議会会長伊丹重賢、同会幹事畑道名、恩賜金の旧取扱人である富田藤太が署名・捺印している。

(八)の「恩賜金継続願ノ件」は、「六 恩賜金継続願ノ件」に綴られた二通の書類からなる。一通目の書類は、明治二十六年九月に十ヶ年間の継続が承認されていた平安義校に対する毎年の恩賜金（ただし従来の二千四百円より千二百円に減額）について、その後に平安義校の廃止が決定したため、あらためて官家士族子弟の教育費としての継続を、同年十二月二十六日に、平安議会会長伊丹重賢が、宮内大臣土

方久元に宛てて願ひ出た書類である。二通目の書類は、明治二十六年九月に継続が承認された恩賜金について、引き続き教育費として下賜することを、同年十月二十九日付で、宮内大臣が承認した書類である。

(九)の「御祝典ニ付伺書」は、「七 御結婚二十五年御祝典ニツキ画幅献納伺書」に綴られた唯一の書類で、明治二十七年（一八九四）に挙行された明治天皇の大婚二十五年御祝典に際し、平安義会からの画幅献納の可否について、同年二月十七日に、平安議会会長伊丹重賢が、宮内大臣土方久元に宛てた伺書である。

(十)の「皇太子殿下御成婚奉祝ニツキ花瓶献納ノ件」は、「八 皇太子殿下御成婚奉祝ニツキ花瓶献納ノ件」に綴られた書類で、明治三十三年（一九〇〇）五月の皇太子（後の大正天皇）御成婚に際し、平安義会が献納した花瓶についての説明書きである。なお、「八 皇太子殿下御成婚奉祝ニツキ花瓶献納ノ件」には、この花瓶の図も収められているが、本稿ではその掲載を省略した。

(十一)の「大正天皇御真影御下賜願」は、「九 大正天皇御真影御下賜願」に綴られた二通の書類からなる。一通目の書類は、大正天皇の御真影の下賜を、大正二年（一九一三）八月十五日に、平安義会会長服部保親と平安義会副総裁尾崎三良が願ひ出たものの控えである。

二通目の書類は、一通目の書類に対して、大正五年（一九一六）二月二十八日に、宮内省が平安義会に宛てた承認書である。

(十二)の「今上両陛下御真影御下賜願」は、「壹〇 今上両陛下御真影御下賜願」に綴られた二通の書類からなる。一通目の書類は、昭和天皇の御真影の下賜を、昭和三年（一九二八）二月十五日に、平安

義会会長浜岡光哲が宮内大臣一木喜徳郎宛てに願ひ出たものの控えである。二通目の書類は、一通目の書類に対して、昭和五年（一九三〇）十月二十四日に、宮内大臣官房総務課長が平安義会会長に宛てた承認書である。

（十三）の「京都市幸御駐輦二際シ相当ノ御褒賞懇願ノ件 宮内大臣宛」は、「壹巻 京都市幸御駐輦二際シ相当ノ御褒賞懇願ノ件 宮内大臣宛」に綴られた唯一の書類で、大正天皇の京都市幸に際し、大正六年（一九一七）十月二十九日に、平安義会副総裁尾崎三良と同会会長浜岡光哲が、宮内大臣波多野敬直に宛てて褒賞を願ひ出たものである。

（十四）の「京都市幸御駐輦二際シ相当ノ御褒賞懇願ノ件 内閣総理大臣宛」は、「壹巻 同 内閣総理大臣宛」に綴られた唯一の書類で、（十三）と同内容の願ひ出を、大正六年十一月に、内閣総理大臣寺内正毅に宛てたものである。

二 史料の翻刻

（一）「記（平安義校と平安義会）」

記

一 平安義校（或ハ平安学校ト記シタルモノアレトモ、平安義校ヲ正名トス）ハ、明治十六年十月ノ設立ニシテ、其設立ハ旧官家士族ノ子弟ヲ教育スル為ニ設ケタルモノトス、其原因ハ明治十二年旧

官家士族ノ困弊ヲ聞食サレ、授産ノ為トテ深キ思召ヲ以テ、内帑金若干ヲ恩貸 仰出サレ、官家士族相依リ授産ニ着手シタルモ、何分不慣ノ事ニテ多ク失敗ニ帰シタリ、其ヲ以テ協議ノ上、明治十六年当時ノ宮内卿へ上申ノ上、其目的ヲ改メ恩貸金ノ残額ヲ以テ官家ノ子弟教育ノ為メ、斯ノ中学程度ノ学校ヲ創設スルニ至リシヨリ、辱クモ其趣ヲ聞食サレ、前ニ授産恩貸金ハ其儘下賜相成、且更ニ当御用邸ノ地所建物共無税ニテ拝借 仰付ラレ、尚ホ年々金円下賜ノ御沙汰ヲモ蒙リタリ、是ニ於テ平安義校ニアリテハ、皇恩ノ優渥ナルニ感佩シ、子弟教養上厚ク

聖意ヲ服膺シ、諄々薰育シ、其功績モ前者ニ比シテ較ヤ見ルベキモノアリシヨリ、同廿三年三月当 御用邸内ノ建造物ヲ旧官家士族へ下賜セラル、ニ至レリ、然ル世運ノ進化ト共ニ教育事業モ益々発達スルニ至リ、一ノ中等学校ヲ維持シテ、子弟涵養ノ実ヲ完成セントスルニハ、多額ノ経費ヲ要スルコト、ナリ、我義校ノ如ク年々ノ恩賜金ト本会資金ノ利子トニテハ、完全ニ一校ヲ存続シ得ルノ費額ニ足ラズ、到底当初ノ目的ヲ遂行スル能ハザルニヨリ、更ニ其方法ヲ更革シ、学校ヲ廃シ其資金ヲ以テ学資ヲ補給シ、有望ノ子弟ヲシテ国内ニ連立セル官公立ノ各種学校ニ入り、完全ナル教育ヲ受ケシムルニ如カズトナシ、斯ニ学資給与ノ制ヲ立テ、明治廿六年十月我旧官家士族団体結会ノ決議ニヨリ本校ヲ廃スルニ至レリ、

二、凡ソ一ノ学校ヲ起スニハ、其設立者ナカルベカラズ、前項ノ平安義校設立者ハ旧官家士族中ニテ宮内卿及三條、岩倉両大臣ノ内命

ニ依リ、之ヲ処理セシモノニ係ル、然レドモ當時未タ団体ナルモノアラズ、明治廿六年ニ至リ官家士族ノ団体ヲ組織シ、同年七月宮内大臣へ上仰シ、御聞置トナレリ、本会ノ目的ハ、前項ニ答申シタル如ク、同族子弟ノ教育ニ在ルヲ以テ、学資給与ノ業ヲナシ傍ラ子弟ノ素行ヲ監察スルノ務ヲナス、之ニ依テ年々恩賜金モ其儘下シ置カレタルモ、明治三十年一月ニ至リ 帝室御資産ノ内ヨリ一時金ヲ賜リ、年々ノ賜金ハ停メラレタリ、爰ニ本会ハ賜金當時ノ令書ニヨリ其御趣旨ヲ奉戴シ、其礎ヲ鞏固ニシテ子弟教育ノ実績ヲ顕揚セン事ヲ勉メ、漸次会則ヲ改善シ、其業務ヲ保持シテ現今ニ至レルモノナリ、其会ノ性質ニ至リテハ、從來ノ儘ナレトモ、現下法人組織ニ變更スルヤ否ハ、其利害得失今尚ホ調査中ナリ、

三、前二項ニ於テ陳ヘタル如ク、学資給与ノ制ヲ設ケタルニヨリ、或ハ子弟ヲ召集シテ訓示ヲ与フルコトアリ、或ハ会員ヲ集合シテ会議ヲナス事アリ、此奨学ノ事務ヲ執行スルニ、相当ノ場所ヲ要ス、因テ曩ニ拝借 仰付ラレタル 御料地及下賜建造物ヲ以テ之ニ充テ、引續キ使用シ居レルナリ、特ニ先年 賢キ辺ノ思召ヲ以テ 天皇皇后 両陛下ノ 御宸影ヲ下賜相成之ヲ此中央ニ掲ケ、大祭日等ニハ会員ヲシテ之レヲ拝セシメ、且此建造物内ニ於テ恩賜金ヲ子弟ニ給与スルハ、薫育上無限偉大ノ勢力ヲ有シ、不言ノ中ニ聖恩ニ感泣スルモノナレハ、本会ノ目的ヲ貫徹セントスルニハ、必ス此地此屋舎ヲ使用セザルベカラス、

四、平安義校又ハ平安義会ト称シ、其名称ヲ異ニスルモ、其実ハ皆旧

官家士族ノ団体ニシテ、其成立目的共ニ同一人物ナリ、唯其時ニ学校アリタルニヨリ、平安義校ト称シ、其奨学事務ヲ執ルニヨリ、平安義会ト名ケタルニ過キズ、其都度宮内卿又大臣ノ認可ヲ得タルモノナリ、故ニ平安義会と平安義校ハ異名同体ナルヲ以テ、拝借地其他ノ物件ニ関スル權利ハ、当然本会ニ属スベキモノナリ、

（二）「本会育英事業ニ関スル概略」

本会育英事業ニ関スル概略

本会ハ去ル明治十六年旧官家士族中有志ノ者相集リ、上京区今出川玄武町ニ平安義校ト称スル中等教育ノ学校ヲ設立シ、同族子弟ノ教育ヲ開始シ、同廿六年迄繼續致来候処、世運ノ趨勢ニ伴ナヒ、就学者ノ数漸次増加シ、加之各専門ノ学科并ニ女子高等教育ノ必要ニ鑑ミ、中等教育ノ一学校ニテハ到底会員子弟各種ノ希望ヲ満タス能ハサルヲ以テ、学校設立ノ趣旨ヲ一変シ、学校ヲ廢シ、学資補給ノ制ヲ定メ、官公立学校其他有力ト認ムル私立学校ヲ指定シ、其区域内ニ於テ各自希望ノ学校ニ就学セシメ、而シテ中等以下ノ学生ハ、男性女性ノ別ナク、授業料ノ全部ヲ支給シ、専門学校以上ニ在ツテハ、其学校程度ニ応シ、一人一ヶ年金五拾円乃至金百円以内ヲ貸与スルコト、ナシ、爾来多少規則ノ變更有之候モ、現今ニ至リ右方針ヲ維持シ、資金ノ充實ヲ以テ漸次指定学校区域ヲ拡張シ、益就学者ノ便益ヲ謀ルト同時ニ、国家有用ノ人材ヲ養成セントス、

猶本会定款、奨学規則、会報等添付致候間、御参照相成度候也、

明治四十四年四月廿七日

(三)「成績(奨学事業の実績)」

(表紙)
一

成績

平安義会

―

慮スル処ナリ、

本会ノ機関ハ定款ニ因リ会長一人、理事四人アリテ、其ノ会務ヲ分掌シ、外ニ四拾貳名ノ評議員アリテ、年々予算ヲ議シ、決算ヲ調査承認シ、尚重要ナル事項ニ付テハ、一々評議員会ヲ開キ、其ノ決議ヲ經テ実行スルコト、ナレリ、而シテ此ノ会長以下評議員ニ至ル総テノ役員ハ、皆無報酬ヲ以テ之レニ従事セリ、

一 本会貸給費ノ恩典ヲ受ケ卒業シタル人員全額

一 帝国大学 五拾七人

一 外国大学 貳人

一 私立大学 貳拾人

一 高等学校 六拾貳人

一 専門学校 八拾六人

一 中学校 參百五拾人

一 高等女学校 百六拾人

一 陸海軍学校 拾人

一 実業学校 五拾一人

一 高等小学校 七百五拾五人

一 尋常小学校 四百五拾人

義務教育トナリシヲ以テ
明治卅二年ヲ限り廃止ス

卒業人員計貳千參人

外中途退学死亡及解除人員計五百六拾人

明治貳拾七年実施以來在学中学資補給セシ金額拾貳万六千七百七拾五

円余

本平安義会ハ明治十二年七月金參万円御下賜ヨリ起リ、次テ同三十年十一月金四万円御下賜相成、爾來大正七年ニ至ル迄、教育資金ヲ會員子弟ニ支給スル側ヲ、其果実ヲ蓄積シタル其金額拾五万五千四百九円余、即チ合計金貳拾貳万五千四百九円余ノ原資金ヲ得タリ、又會員子弟教育ノ為メ支出シタル金額ハ、既ニ拾貳万六千七百七拾五円余ニシテ、其成績トシテハ別紙ノ通り、帝国大学以下高等小学ニ至ル其人員貳千人ノ卒業者ヲ得タリ、然ルニ世ノ發展ニ伴ヒ学校ノ数ヲ増シ、同時ニ其就学者ヲモ増シ、加フルニ授業料ハ増額トナリ、本年ノ如キ其ノ授業料ノ全額ヲ補給スルコトヲ得ス、其額ニ応シ幾分ノ減額ヲ以テ支給スルニ拘ハラス、尚其ノ総額金壹万貳千四百餘ヲ要シ、其ノ人員四百名以上トナリシ、尚會員ノ子弟ハ追々就学スルモノ年二月ニ増加スル勢ヲ示セリ、此ノ趨勢ヲ以テ進マンニハ、近キ将来ニ於テ自然會員子弟ハ、其ノ学資ノ小部分ノ補給ヲ受クルニ止マリ、遂ニ本会奨学規則ノ旨趣ヲ貫徹スルコト能ハザルハ必然ニシテ、役員及會員一同苦

一 現在々校学生々徒ノ人員及一ヶ年支給金額

一 帝国大学 貳拾人

一 私立大学 参拾壹人

一 高等学校 七人

一 専門学校 拾七人

一 中学校 百貳拾八人

一 高等女学校 百拾貳人

一 師範学校 貳人

一 実業学校 五拾人

一 高等小学校 四拾人

計人員四百七人

右人員ニ対スル一ヶ年学資補給金壹万貳百円余

一 原資金下賜ノ年月並ニ金額

一 金参万円

明治十二年七月旧官家士族授産ノ為メ拝借ノ処、同二十二年六月十二日教育費トシテ御下賜

一 金四万円

明治三十年一月九日教育費トシテ御下賜

一 金拾五万五百四拾九円

明治二十七年ヨリ大正七年ニ至ル原資ノ果実ヲ、貸給費其他費用ヲ支出シタル残金及有利ナル株式ノ利益金等ヲ積立タルモノ

一 現在資産

一 甲号公債額面 金六万貳千四百五拾円

一 京都市公債額面 金六万五千八百円

一 東京電灯会社株式 貳百四株 金壹万貳百円

一 京都府農工銀行債権 金貳万参千円

一 尾三農工銀行債権 金五千五百円

一 大阪府農工銀行債権 金参万円

一 定額預金 金五千壹百四拾九円貳拾四銭

一 現金 金四千八百壹円八拾八銭

一 本会敷地 坪数貳千壹百八拾坪参合壹勾

一 家屋土蔵 坪数百五拾壹壺

一 学生貸与金額 金壹万参千六百四拾八円五拾五

銭

(四)「御真影御下賜ノ御沙汰書」

京都府下士人之義ハ、旧御由緒不浅廉ヲ以テ、嚮キニ就産之為メ、特殊之恩典有之候処、洪恩感戴一社設立爾来、事業勉勵社員集会等之節、必東向遥拜式等取行候、至情ヲ以テ、足下等諸願之次第有之、聖影下賜之義 具視 及言上候処、未タ一般士人エ拝領ノ例規無之候得共、出格之思召ヲ以テ、速ニ御允准 具視立 被下賜、該社エ可下付トノ御沙汰ニ候、此旨奉戴永遠護持可致様、從足下等可被申伝候也、

明治十三年四月

從一位岩倉具視

伊丹重賢殿

尾崎三郎殿
桜井能監殿

〔五〕「平安義会組織承認」

丙第六拾四号

下京区油小路下魚棚下ル油小路町士族

服部保親

上京区御車道清和院口下ル二丁目梶井町士族

鳥居川憲昭

本年七月十日宮内大臣進達方願出候、平安義会組織承認之件ニ対シ、

同廿八日付ヲ以同大臣ヨリ聞置候、右相達ス、

明治廿六年八月一日

京都府知事千田貞暁

〔写〕

(朱印・抹消)
宮内省・内務課
乙第八五号

京都府

一 本年本月十日付乾第一〇号上申、其府士族服部保親外壹名出頭、

平安義会組織承認ノ件、右聞置候事、

明治廿六年七月廿八日

宮内大臣子爵土方久元

(六)「官家士族恩賜金管理ノ件ニツキ平安義会設立ニ伴ヒ三條家ヨリ
引継方願出ノ書類」

今般官家士族恩賜金管理之件ニ付、別紙写之通、宮内大臣へ相伺候処、
朱書之通り指令相成候ニ付、各管理事務一切御引継致候事、

明治廿六年九月十一日

桜井能監(印)

尾崎三良(印)

伊丹重賢(印)

平安義会

会長伊丹重賢殿

追テ基金ハ三條家ニ於テ管理致居候ニ付、御便宜次第同家ヨリ御
請取相成度、又平安義校之義ハ、同幹事中川武俊へ御指図相成度

候事、

在京都旧官家士族へ下賜金管理ノ義、従前御達ニヨリ是迄管理致来候
得共、過般年賜金継続願書差出候節、右管理方被免度旨、追申致置候
処、其後在京都旧官家士族之輩、平安義会ナル者ヲ組織シ、御認可ヲ
蒙リ候末、今般伊丹重賢ヲ右会長ニ撰挙候趣、就テハ従来我等管理之
事務並物件等、悉皆同会ニ引渡候テ可然哉、此段相伺候也、

明治廿六年九月八日

桜井能監 印

尾崎三良 印

宮内大臣子爵土方久元殿

伊丹重賢 印

書面伺之通^{朱書}

明治廿六年九月八日

宮内大臣 印

書面伺之通^{朱書}

明治廿六年九月八日

宮内大臣 印

(七)「官家士族恩賜金ニ関スル事務引継ノ件ヲ広告スル書類」

在京都旧官家士族^{諸君ニ} ○廣告ク

今般其筋伺済ノ上、從來我等管理シタル恩賜金、及之ニ附帶セル事務、悉皆平安義会ヘ引継致候ニ付、左ニ公文ヲ掲ケ、之ヲ廣告ス、

宮内大臣ヘ伺

在京都旧官家士族ヘ下賜金管理ノ義、従前御達ニヨリ是迄管理致来候得共、過般年賜金継統^順○書差出候節、右管理方被免度旨、追申致置候処、其後在京都旧官家士族之輩、平安義会ナル者ヲ組織シ、御認可ヲ蒙リ候末、今般伊丹重賢ヲ右会長ニ撰挙候趣、就テハ從來我等管理之事務并物件等、悉皆同会ニ引渡候テ可然哉、此段相伺候也、

明治廿六年九月八日

桜井能監 印

尾崎三良 印

伊丹重賢 印

内大臣子爵土方久元殿

平安義会ヘ通牒

今般官家士族恩賜金管理之件ニ付、別紙写之通、宮内大臣ヘ相伺候候、朱書之通り指令相成候ニ付、各管理事務一切御引継致候事、

明治廿六年九月十一日

桜井能監

尾崎三良

伊丹重賢

平安義会

会長伊丹重賢殿

追テ基金ハ三條家ニ於テ管理致居候ニ付、御便宜次第同家ヨリ御請取相成度、又平安義校之義ハ、同幹事中川武俊ヘ御指図相成度候事、右ニ付、本月九日平安義会会頭^長伊丹重賢、及同幹事畑道名立会之上、三條家ニ於テ、右基金保管取扱人、同家々扶富田藤太ヨリ、悉皆受取完了候事、

基金現在品

- 一 整理公債証書額面五千円也
- 一 日本鐵道会社株式貳百九拾九株也
- 一 同上第五回發行株式貳拾三株也
- 一 東京市公債証書額面參千円也
- 一 現金壹千八拾八円八錢六厘

以上

旧管理人

伊丹重賢(印)

尾崎三良(印)

桜井能監(印)

明治廿六年九月十一日

平安義会々頭長

伊丹重賢(印)

同 幹事

畑 道名(印)

旧 取扱

富田藤太(印)

スル同族子弟へハ、一般ニ小学校ヨリ帝国大学ニ至ルマテノ各授業料ヲ与へ、貧困ノ者へハ特ニ文具料若干ヲ補給シ、大ニ有用ノオヲ養成致候、就テハ右恩賜年金ハ、同族子弟教育ノ為メ設立セシ平安義校へ、御下賜相成候儀ニ御座候へトモ、今般不得止次第ヨリシテ其方法ヲ改メ、義校ハ廃止仕候モ、子弟教育ノ計画ハ、終始渝ラス将来ニ継紹シ、同族一般無限ノ恩波ニ浴シ、至仁ノ 聖旨、充分貫徹為致度候ニ付、前頭ノ事情篤ク御洞察、右恩賜年金ハ、更ニ子弟教育費トシテ、引続拝戴被仰付候ハ、難有仕合ニ奉存候間、御開届被成下度、此段奉悃願候也、

明治廿六年十二月廿六日

平安義会々長

從三位伊丹重賢(平安義会
會長之印)

宮内大臣子爵土方久元殿

(八)「恩賜金継続願ノ件」

恩賜金継続願

平安義校之儀ハ明治十六年十一月設立以來、恩賜年金貳千四百円ヲ以テ経費ト為シ、京都旧官家士族子弟ヲ教育罷在候処、本年九月右恩賜年金満限ニ至リ、更ニ向十ヶ年間年金壹千貳百円下賜ノ 御沙汰ヲ蒙リ、難有奉存候、然ルニ同校維持ノ儀ニ付テハ、従来資金欠乏ノ上、恩賜金額モ半額ニ相成、将来継続ノ見込難相付場合ニ立至候ニ付、今般同族総会ヲ開キ、評議致候末、不得止同校ヲ廢シ、代ユルニ給費貸費修学ノ方法ヲ以シ、恩賜年金壹千貳百円ト、明治廿一年六月下賜ノ基金ヨリ生スル利子若干トヲ以テ資金ト為シ、京都住即山城国ニ住居

(朱印)
宮内省
乙第一五一号

願之趣特別ヲ以テ聞届、本年九月十三日相達シタル年金ハ、自今士族子弟教育費トシテ、其会へ下賜候事、

明治廿六年十月廿九日(宮内大
臣之印)

(九)「御祝典ニ付伺書」

御祝典ニ付伺書

一 今回御挙行可被遊

御結婚満二十五年 御祝典ニ就テハ、平安義会ヨリ為祝賀画幅之類献納仕度、御受納被為在候ハ、難有奉存候、奉 仰御許可候、敬白、

明治二十七年二月十七日

宮内大臣子爵土方久元殿

平安義会々々長伊丹重賢(平安義会
会長之印)

(十)「皇太子殿下御成婚奉祝ニツキ花瓶献納ノ件」

此の御花瓶ハ、純銀の一塊より鎚にて打ち起したるものにして、継ぎ合せの処なし、又口の所にて地銀を厚く保たしめたるは、六ヶ敷業なり、菊の御紋章、鶴の丹頂及び眼は純金、松の葉ハ青金、雀の羽毛の黒き処は濃き烏金、足ハ稍淡き烏金を各嵌入し、松の幹も亦烏金、松笠は銅、松葉ハ濃淡異りたる四種の臘銀を各嵌入せしものなり、

(十一)「大正天皇御真影御下賜願」

本会ハ御由緒浅カラサル廉ヲ以テ、屢次特殊ノ御恩典ニ浴シ、会員一同感激之至リニ堪ヘス候、乃チ別紙定款ノ如ク、専ラ意ヲ子弟ノ教育ニ敦シ、鴻恩ノ万一二報ヒ奉ランコトヲ期シ候、就テハ毎年三大節ニハ恭シク

御聖影ヲ奉掲シ、会員及子弟等拝礼仕度奉存候ニ付(是レヨリ前、明治十三年四月、旧官家士族設立ニ係ル誘導社 御聖影御下賜ノ特典ヲ賜ハリタル例アリ)、明治三十八年二月 御聖影御下賜ノ儀出願

仕候処、同月十三日、御允准ヲ蒙リ、会員多村知興拝戴仕、本会清浄ノ室ニ奉安シ、尔来三大節ニ奉掲拝礼仕候、然ルニ昨年明治天皇崩御

今上陛下 御踐祚遊ハサセラレ候ニ付、前述ノ御由緒ニ拠リ、更ニ今上陛下御聖影御下賜被成下度、此段奉請願候也、

大正二年八月十五日

平安義会々々長 服部保親

平安義会副総裁男爵 尾崎三良

聖上御写真下賜候條、便宜ノ日時ニ拝受者、可被差出、此段申入候也、
大正五年二月二十八日

宮内省(宮内省印)

平安義会

足下

(十二)「今上両陛下御真影御下賜願」

昭和三年二月十五日進達済(若杉印)

御願書

本会ハ御由緒浅カラサル廉ヲ以テ、屢次特殊ノ御恩典ニ浴シ、会員一同感激之至リニ堪ヘス候、乃チ別紙定款ノ如ク、専ラ意ヲ子弟ノ教育ニ敦シ、鴻恩ノ万一二報ヒ奉ランコトヲ期シ候、就テハ毎年三大節ニハ恭シク

從二位勲一等男爵尾崎三良

奨励シ、其後義校ヲ廃シ、其代リニ平安義会ヲ創設シ、官家士族ノ子弟ヲシテ、各種ノ学校ヘ入学セシメ、最初ヨリ以来三十有五年、官家士族ヲシテ、方向ヲ誤ラシメズ、其子弟教育ノ実績ヲ挙クルコト、別表記載ノ通ニ有之候、猶爾来永遠同子弟ヲシテ、益々學業ヲ奨励進展セシムル根本タル義会ノ基礎ノ益々鞏固ニナリタルハ、元ヨリ帝室御眷顧ノ優渥ナルニ拠ルト雖トモ、然トモ同人尽力ノ効モ亦没スヘカサル儀ト存候、今般車駕旧都ニ駐輦アラセラル、ヲ機会トシテ、此事ヲ上聞ニ達シ、相当ノ御褒賞被為在度、奉懇願候、右ハ先年御即位御大札ノ節、上申可仕之処、句々ノ際ニ付、今般御盛典ニ際シ、本会ヲ代表シテ、此段奉願候、誠恐誠惶謹言、

大正六年十一月

社団法人平安義会長

内閣総理大臣寺内正毅殿

正六位勲四等浜岡光哲（平安義会会長 印）

おわりに

本稿で翻刻・紹介した史料から、あらたに得られた平安義会の沿革に関する知見を整理することで、結びとしたい。

(一)の「記（平安義校と平安義会）」であるが、「一」では平安義会設立の経緯について、明治十二年（一八七九）の三万円の恩貸金と産業誘導社の開設から、明治十六年（一八八三）の平安義校の設立と土地建物（旧二条邸）の拝借および新たな恩賜金（年二千四百円）の下賜、明治二十三年（一八九〇）の建物（旧二条邸）の下賜、明治

二十六年（一八九三）の平安義会結成の決議と平安義校の廃止までを概観している。「二」では平安義校の設立が宮内卿（徳大寺実則）および三条実美・岩倉具視の内命であったことに触れた上で、明治二十六年に平安義会が組織されたことに伴い、その承認について同年七月に宮内大臣へ上申し、聞き置かれたとある。また、明治三十年（一八九七）に一時金（四万円）が下賜され、毎年の恩賜金が停止されたことも記されている。

さらに、「三」では平安義校で使用してきた土地建物（旧二条邸）が、子弟への訓示や会員による会議の場、あるいは、下賜された御真影を大祭日に拝礼する場として、平安義会の奨学事業を執行する上でも必要不可欠であることを強調する。そして、「四」では平安義会と平安義校は異名であるものの、旧官家士族の団体としての目的は同一であることを主張し、平安義校の土地建物（旧二条邸）に関する権利が、平安義会に属することを明言している。

これらの内容から、(一)の「記（平安義校と平安義会）」は、旧稿ですでに紹介・考察した「平安義会沿革概略」と同様に、平安義会を法人組織化するに際して作成された書類で、旧二条邸の土地建物等の権利が平安義会に属することを証明するため、平安義校と平安義会の連続性を説明したものと考えられる。

(二)の「本会育英事業二関スル概略」からは、明治四十四年（一九一）時点における平安義会の奨学事業の概要について、中等教育以下の学生には、男女ともに授業料の全額を支給し、専門学校以上の学生には、その学校の程度に応じて一人年間五十円あるいは百円

以内を貸与していたこと、当初は官公立学校と特定の私立学校を対象としていたものの、次第に指定する学校の範囲を拡大していったことなどが確認できる。

(三)の「成績(奨学事業の実績)」によると、大正七年(一九一八)時点における平安義会の総資産は、明治十二年の下賜金(恩貸金)三万円と明治三十年の下賜金(一時金)四万円に、これらの運用利益十五万五千四百九十九円を加えた二十二万五千四百九十九円とある。また、大正七年までに平安義会の奨学事業の恩恵により卒業した者は二千三人で、総支給額は十二万六千七百七十五円、同年時点で奨学事業の恩恵を受けている在学生は四百七人で、年間支給額は一万二百円であるといい、これらの内訳が詳細に示されている。

さらに、大正七年頃になると、進学者の増加と授業料の増額により、これまでの奨学規則通りの事業を継続できるかどうかが課題となっていたことも判明する。なお、こうした課題に対応する役員は、会長一名・理事四名・評議員四十二名で、いずれも無報酬で会務に従事していたとある。

(五)の「平安義会組織承認」からは、平安義会の組織を宮内省に承認してもらうため、明治二十六年(一八九三)七月十日に、平安義会の服部保親等が宮内大臣土方久元へ願ひ出たのに対し、七月二十八日に、宮内大臣より京都府へ、八月一日に京都府知事千田貞暁より平安義会の服部および鳥居川憲昭へ、これを承認する旨の通達がなされたことが分かる。なお、平安義会組織承認の経緯については、後に平安義会第二代会長となる尾崎三良の日記⁵⁾に関連記事があるので紹介す

る。

(i) 明治二十六年五月十八日条

(前略) 午后鳥居川、服部復来ル、此兩人ハ平安義会ノ総代トシテ来ルト云、其要求スル所三点アリ、一二曰ク、官家士族ノ区域ヲ定ムル事、二二曰、我等三人ノ内ヲ平安義会々々長ニ推戴スル事、三三曰、平安義校理事ヲ公撰ニスル事等ナリ、猶談話ニ刻ヲ移ス、且予ハ明日出立西京ニ趣クニ付猶西都ニ於テ緩々談話スベシト慰諭シテ遣ル、

(ii) 明治二十六年五月二十五日条

平安義校ニ至リ生徒ノ授業及柔術、擊劍等ヲ一見シ、午后三時過加茂へ帰ル、兼田義路、増沢季的、岩橋元柔、木村時義、八田益満、是皆平安義会総代議員ナリ、其言ニ曰ク、平安義会ハ官家士族ノ団体ナルヲ以テ之ヲ公認セラレ、恩賜金及義校等ノ事ハ総テ之ニ計ル事ニセラレタシ、且又会長ニハ伊丹、予ノ内一名ヲ推選シタシ、木村ノ事ニ願クハ予ニ於テ承諾アラン事ヲ望ム云々、予之ニ答テ曰ク、平安義会ヲ以テ官家士族総体ノ団体ナリト予等ニ於テ認ムルトモ何ノ効力モナキ事ナリ、宮内省ニ於テ公認スル事ニナレバ或ハ可ナルベク、其他彼等ノ言フ所皆同意ナリ、尤我等会長ニナル事丈ケハ御免ヲ蒙ル、(後略)

(iii) 明治二十六年六月二十四日条

(前略) 伊、^(伊丹重賢・桜井能監)桜二氏ト平安義会認可ノ事ニ付協議ヲ為ス、(後略)

これらの記事によると、五月十八日に平安義会の総代として京都在住の鳥居川憲昭・服部保親が東京の尾崎三良を訪ね、平安義会に関する要望を伝えている。尾崎は明日から京都に赴くので、その際に詳しく話を聞くとし(i)、五月二十五日に京都在住の平安義会総代議員たちと懇談の場を持ったのである。そこで総代議員たちからは、尾崎か伊丹重賢を平安義会会長に推薦したいこと、平安義会を官家士族の団体として公認してほしいことなどが要望された。これに対して尾崎は、宮内省に公認してもらうべきとの見解と、会長を固辞する姿勢を示している(ii)。そして、尾崎は帰京後の六月二十四日に、宮内省による平安義会の公認について、伊丹や桜井能監と協議しており(iii)、(五)の「平安義会組織承認」に記された、七月十日の服部保親等による宮内大臣への願い出が、尾崎等の助言に基づくものであったことが確認できる。

(一六)の「官家士族恩賜金管理ノ件ニツキ平安義会設立ニ伴ヒ三條家ヨリ引継方願出ノ書類」、(七)の「官家士族恩賜金ニ関スル事務引継ノ件ヲ広告スル書類」、(八)の「恩賜金継続願ノ件」からは、明治十六年(一八八三)の平安義校設立により、十ヶ年間を限り年二千四百円の恩賜金が下賜されていたが、明治二十六年(一八九三)に年限を迎えるため、恩賜金を管理してきた伊丹重賢・尾崎三良・桜井能監が、恩賜金の継続を願っていたこと、その際に恩賜金管理の辞退を申し入れたこと、この間に京都在住の官家士族が平安義会

を組織し宮内省の認可を得たこと、同会会長に伊丹が就任したこと、以上を受けて恩賜金の管理事務を同会に引き継ぎたいと、同年九月八日に、宮内大臣土方久元に願ひ出て承認されたことが、まず判明する。また、同年九月十一日には、恩賜金の管理事務を平安義会に引き継ぐ旨を、伊丹・尾崎・桜井が書面で平安義会に通知している。この通知では、これまで恩賜金による基金が三条邸で保管され、三条家家令の富田藤太がその実務を担当していたので、富田より基金を受け取るべきこと、平安義校については同校幹事の中川武俊より指図を受けるべきことが、追記されている。そして、同年九月九日に、平安義会会長の伊丹と同会幹事の畑道名の立ち会いのもと、三条邸において富田より平安義会への基金の引き継ぎが完了しており、これら基金の内訳が、同年九月十一日付で、京都在住官家士族に向けて報告されたのである。

同年九月十三日には、恩賜金がさらに十ヶ年間継続されることが通知されたものの、年二千四百円から年千二百円に半減されたため、その後の官家士族の総会において、平安義校の廃止が決定された。ただし、京都在住の官家士族子弟への教育支援として、新たに学資の支給事業を始めることとなったため、同年十二月二十六日に、平安義会会長伊丹は宮内大臣土方に対して、年千二百円の恩賜金の継続をあらためて願ひ出たのである。『尾崎三良自叙略伝』⁽⁶⁾には、同年十月よりさらに十ヶ年間毎年千二百円を下賜することについて、同年九月十三日に宮内省が同会会長伊丹に宛てた「恩賜金継続の御達」が掲載されている。なお、平安義校の廃止決定後の恩賜金継続願が、同年十二月

二十六日付で出されているにもかかわらず、宮内大臣によるその承認が、同年十月二十九日付であるのは、十ヶ年間継続されることとなった恩賜金の下賜が同年十月からとされており、遑って十月付としたためではないかと推測しておく。

ところで、恩賜金の継続や引き継ぎの経緯についても、『尾崎三良日記』に関連記事があるので紹介する。

(I) 明治二十六年三月十日条

午前九時有栖川宮ニ至ル、但伊丹ト約シ同邸ニ会同シ、与ニ宮ニ(兼仁親王)謁シ京都官家士族教育賜継続ノ義ヲ宮ニ於テ尽力アラン事ヲ願ヒ、且是レハ帝室経済会ノ議ニ掛ルヲ以テ、其重ナル人即伊藤伯ニ先(博文)以テ御依頼アラン事ヲ願、且宮ノ伊藤伯ヘ談ジラルベキ口演ノ覚書ヲ呈ス、宮モ快ク御承諾ニ為ル、猶平安義校将来ノ事ドモヲ談シテ退ク、

(II) 明治二十六年三月十三日条

(前略) 京都官家士族恩賜金之義ニ付有栖川宮ヨリ伝言ノ旨有之、速ニ願書ヲ出スベシトノ事ナリ、

(III) 明治二十六年四月四日条

午前九時出門、土方宮内大臣ヲ訪フ、京都官家士族教育資恩賜金(久元)継続願ヲ呈出ス、帰路伊藤伯、有栖川王ヲ訪、不在ナリ、又明日ヲ約シテ別ル、(後略)

(IV) 明治二十六年五月三日条

午前八時三十分出門、土方宮内大臣ヲ訪フ、兼約ニヨリ伊丹、桜井已ニ在リ、一同面会、京都官家士族子弟教育資金願並ニ将来ノ所ハ京都府知事(千田貞曉)ヘ管理方御下命相成度旨ヲ請願ス、夫ヨリ直ニ条公邸ニ書類調ヲ為ス、午后五時帰宅、夕刻桜井ヨリ書面来ル、官家学資金願書修正請書封入ス、則予、署名捺印ノ上伊丹ヘ回送ス、

(V) 明治二十六年五月十二日条

午前八時出門、土方子ヲ訪、伊丹ト兼約ニ依リ宮内大臣ニ面会、旧官家士族ニ恩賜ノ授産金及年々恩賜セラル、教育費ハ元ト我々三人ヘ保管並ニ成績ヲ挙グベキノ命令ニ依リ、我々勝手ニ致シタル訳ニハ無之、決シテ初メヨリ無条件ニテ下賜セラレタルモノニ無之旨初メヨリ其性質ヲ説明シ、且其御沙汰書並岩公書簡写ヲ示シタルニ、略了解シタルトノ事ナリ、然レドモ未ダ当テハナラズ、(後略)

(VI) 明治二十六年五月二十三日条

早起、京都府知事千田ヲ訪フニ平安義校ノ事ヲ談ス、同人ハ後面倒生ズベシトシテ容易ニ諾承スベキ色ナシ、(後略)

(VII) 明治二十六年七月二十七日条

桜井ヨリ書面ヲ得、伊丹ノ書面ヲ封入ス、京都平安会ニ於テ会長

ニ推選シタルヲ以テ、如何スベキヤノ相談ナリ、

(Ⅷ) 明治二十六年七月二十八日条

桜井へ返書遣シ、伊丹平安義会々長承諾スベキ旨勧誘ノ書面ヲ遺サン事ヲ依嘱ス、

(Ⅸ) 明治二十六年九月十日条

桜井へ書面遣シ、平安義校及士族恩賜金引渡シ等ニ関スル書案ヲ封入ス、(後略)

(Ⅹ) 明治二十六年九月十一日条

桜井ヨリ書面来ル、官家士族恩賜管理引継書ヲ封入ス、直ニ捺印シテ郵返ス、

(Ⅺ) 明治二十六年十月九日条

(前略) 午前三条公邸ニ至ル、書類調ヲ為ス、午后伊丹重賢、畑道名、^(三 桑家令)富田藤太立会ノ上、平安校基金悉皆ヲ引渡ス、(後略)

(Ⅻ) 明治二十六年十月十二日条

(前略) 有栖川宮ニ至リ其家扶ニ面会、過日平安義校恩賜金御沙汰ノ御札ヲ申述ル、夫ヨリ参朝伺天機、且桜井ニ面会、官家士族恩賜ニ関スル事務引継ノ件ヲ広告書ニ捺印セシメ、帰後富田へ廻シ、同人捺印ノ上伊丹へ廻ス事ヲ申遣ス、(後略)

(Ⅰ)(Ⅱ)の記事によると、明治二十六年に年限を迎える恩賜金の継続について、伊丹重賢・尾崎三良が有栖川宮に働きかけるなど、すでに同年三月にはその対応が始められていたことが分かる。有栖川宮の助言により、同年四月四日に恩賜金継続願が宮内大臣土方久元に提出されているが(Ⅲ)、『尾崎三良自叙略伝』には、明治二十六年三月付で、伊丹・尾崎・桜井能監が、宮内大臣土方に宛てて、年二千四百円の恩賜金の十ヶ年継続を求める「恩賜金継続願書」が掲載されている。

(Ⅳ)(Ⅴ)の記事からは、同年五月に修正した恩賜金継続願があらためて準備されるとともに、伊丹・尾崎・桜井が宮内大臣に対して、恩賜金の管理等を京都府知事千田貞暁に委譲したいと願ひ出していたことが確認できる。なお、千田は後にこれを固辞している(Ⅵ)。(Ⅶ)(Ⅷ)の記事では、同年七月に伊丹が平安義会会長に推薦され、尾崎がこれを後押しした様子が見える。このように以上の『尾崎三良日記』の記事からは、(Ⅵ)の「官家士族恩賜金管理ノ件ニツキ平安義会設立ニ伴ヒ三條家ヨリ引継方願出ノ書類」の記述内容より詳しい情報を得ることができる。

同年九月十日・十一日には、尾崎と桜井の間で官家士族恩賜金管理引継書がやり取りされ、書類への捺印がなされており(Ⅸ)(Ⅹ)、(Ⅵ)の「官家士族恩賜金管理ノ件ニツキ平安義会設立ニ伴ヒ三條家ヨリ引継方願出ノ書類」の一通目の書類が、これに相当すると考えられる。また、同年十月九日には、尾崎が三条公邸を訪れ、平安義会会長伊丹、

同会幹事畑道名、三条家令富田藤太の立ち合いのもと、平安義校基金が平安義会に引き渡され(Ⅺ)、同年十月十二日には、(Ⅶ)の「官家士族恩賜金ニ関スル事務引継ノ件ヲ広告スル書類」に尾崎が捺印の上、同書類を富田・伊丹へ回送している(Ⅻ)。なお、基金の引き継ぎ完了について、京都在住の官家士族に報告した(Ⅶ)の「官家士族恩賜金ニ関スル事務引継ノ件ヲ広告スル書類」では、同年九月十一日付となっているが、(Ⅻ)の記事により、基金の引き継ぎが実際に完了したのは、同年十月九日であったことが判明する。

(Ⅸ)の「御祝典ニ付伺書」、(Ⅹ)の「皇太子殿下御成婚奉祝ニツキ花瓶献納ノ件」からは、明治二十七年(一八九四)に挙行された明治天皇の大婚二十五年御祝典や、明治三十三年(一九〇〇)の皇太子(後の大正天皇)御成婚といった皇室の祝祭に際し、平安義会が画幅や花瓶を献納しようとしていたことが分かる。

(Ⅳ)の「御真影御下賜ノ御沙汰書」、(Ⅺ)の「大正天皇御真影御下賜願」、(Ⅻ)の「今上両陛下御真影御下賜願」および(Ⅰ)の「記(平安義校と平安義会)」によると、明治十三年(一八八〇)に産業誘導社へ明治天皇の御真影が特例により下賜されたことを先例として、明治三十八年(一九〇五)にも明治天皇の御真影、大正五年(一九一六)には大正天皇と皇太子の御真影、昭和五年(一九三〇)には昭和天皇の御真影が下賜され、御真影は平安義会の土地建物(旧二条邸)の清浄な部屋に奉安し、三大節等の大祭日には御真影を中央に掲げて、会員一同でこれに拝礼していたという。

(十三)の「京都行幸御駐輦ニ際シ相当ノ御褒賞懇願ノ件 宮内大

臣宛」、(十四)の「京都行幸御駐輦ニ際シ相当ノ御褒賞懇願ノ件 内閣総理大臣宛」では、平安義校設立以来の平安義会による官家士族子弟への教育実績が、別紙なるものを根拠に強調されている。なお、この別紙はここに収められていないが、(三)の「成績(奨学事業の実績)」のような書類であったと考えられる。

最後になるが、本稿で翻刻・紹介した『平安義会資料』所収「由緒沿革誌 其ノ一」によって、明治二十四年(一八九三)五月に、京都在住官家士族の主導で組織されたという平安義会が、明治二十六年(一八九三)七月に伊丹重賢を会長とするとともに、宮内省に公認され、同年九月に伊丹・尾崎三良・桜井能監より同会へ基金の引き継ぎと、年千二百円の恩賜金の継続、同年十月の平安義校廃止の決定と、恩賜金の平安義会への支給継続がなされた経緯の詳細が、特に鮮明になったものと考えられる。平安義会が官家士族子弟への奨学金事業を展開するに当たって、明治二十六年における同会の一連の動向は、その基礎を固めるうえできわめて重要であったといえよう。

また、これまで平安義校の設立については、年千四百円の下賜が決まった明治十六年(一八八三)十月から翌年のはじめにかけて、同校廃止の決定についても、明治二十六年以降としか分からず、いずれも時期が特定されていなかった。本稿で紹介した(Ⅰ)の「記(平安義校と平安義会)」に「平安義校ハ明治十六年十月ノ設立」(明治廿六年十月我旧官家士族団体結会ノ決議ニヨリ本校ヲ廃スル)、(Ⅷ)の「恩賜金継続願ノ件」には「平安義校之儀ハ明治十六年十一月設立以来」と書かれており、これらの記述に従えば、平安義校の設立時期は明治

十六年十月または十一月、同校の廃止が決定された時期は明治二十六年十月ということになる。あらたに得られた情報として、ひとまずここに記しておく。

注

(1) すでに、「平安義会沿革概略」の翻刻と官家士族の先行研究―『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の紹介(二)―(『駒沢女子大学研究紀要』二四、二〇一七年)、「由緒沿革誌其ノ四」の翻刻と平安義校―『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の紹介(二)―(『駒沢女子大学研究紀要』二五、二〇一八年)を発表している。あわせて参照されたい。

(2) 平安義会に関する先行研究には、小林丈広『明治維新と京都―公家社会の解体―』(臨川書店、一九九八年)、山下奈津美「平安義会のあゆみ―二條家と同志社をつなぐもの―」(『同志社大学歴史資料館館報』一一、二〇〇八年)がある。

(3) 「壹 沿革ノ概略」は、「平安義会沿革概略」記「本会育英事業ニ関スル概略」成績」という、異なる時期に作成された四つの書類で構成されている。このうち一番目に綴られた「平安義会沿革概略」のみ、注(1)拙稿(二〇一七)においてすでに翻刻・紹介している。

(4) 伊丹重賢・尾崎三良・桜井能監は、いずれも明治維新の後、新政府に出仕していた東京在住の官家士族で、官家士族に下賜された恩賜金の管理等を任されていた。

(5) 伊藤隆・尾崎春盛編『尾崎三良日記 下巻』(中央公論社、一九九二年)。

(6) 『尾崎三良自叙略伝 上巻』(中央公論社、一九七六年)。